梅古木

七、九、

W 99
TA 81

國立國會圖書館藏

梅古古美三編序

夫聖人之物ヨリ凝滞セズ今狂訓之事物ニ騒ゲズ未人之物ニ仰ヲモ駭ゲズ中庸住ナガラ悠々然トシテ能ク世ニ雅ヲ移ス名人情ヲ書著キテ和漢の理

内

窟ぐらに古文を奪體撰集の物語

あるぶ又云ふ袖口に住て稼せんろう者

外ちらに借物なりけれども

と世よ

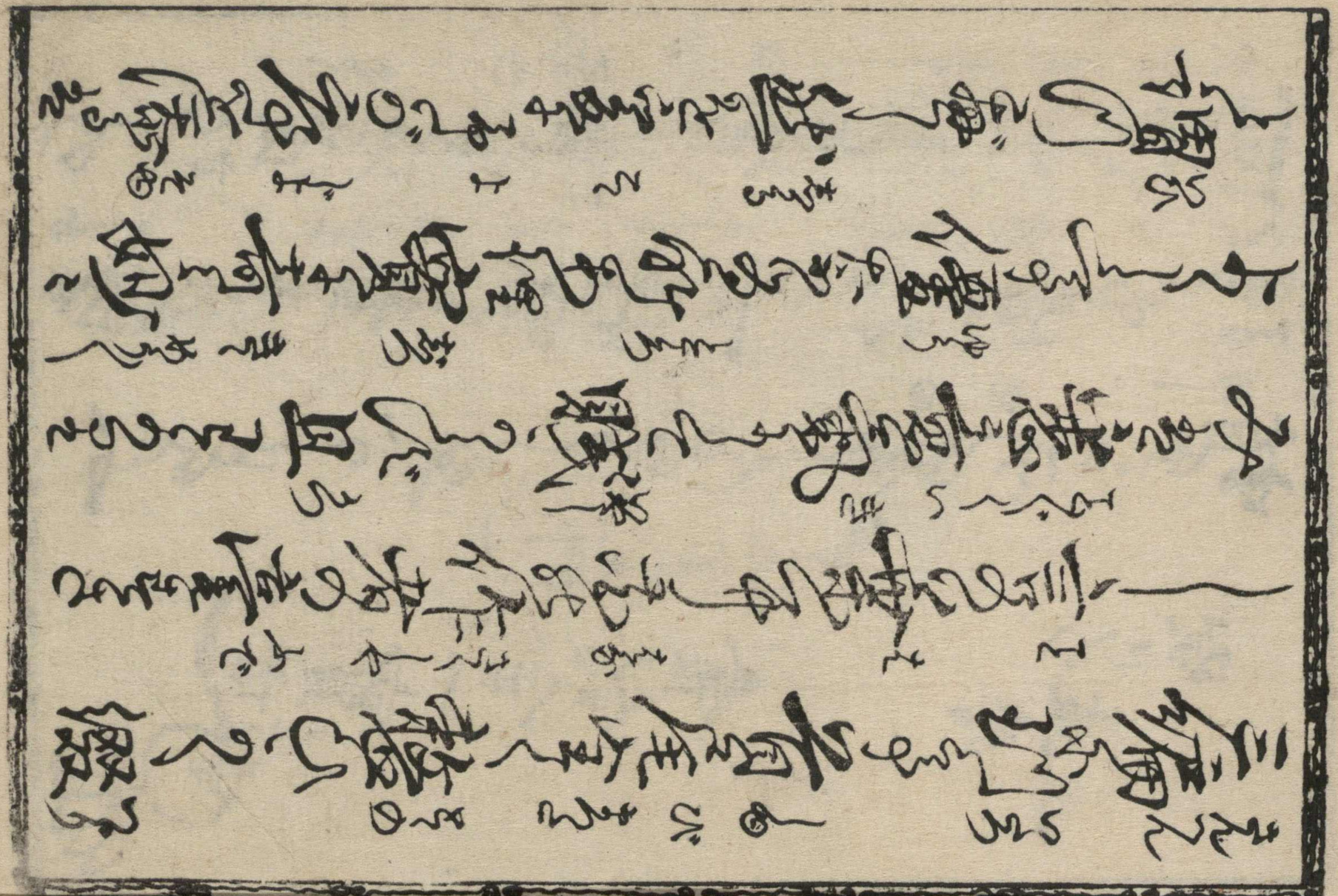
ふ源りを專とする種ぐさ

もあるべし

香うの氣いきを知る

這小冊

三



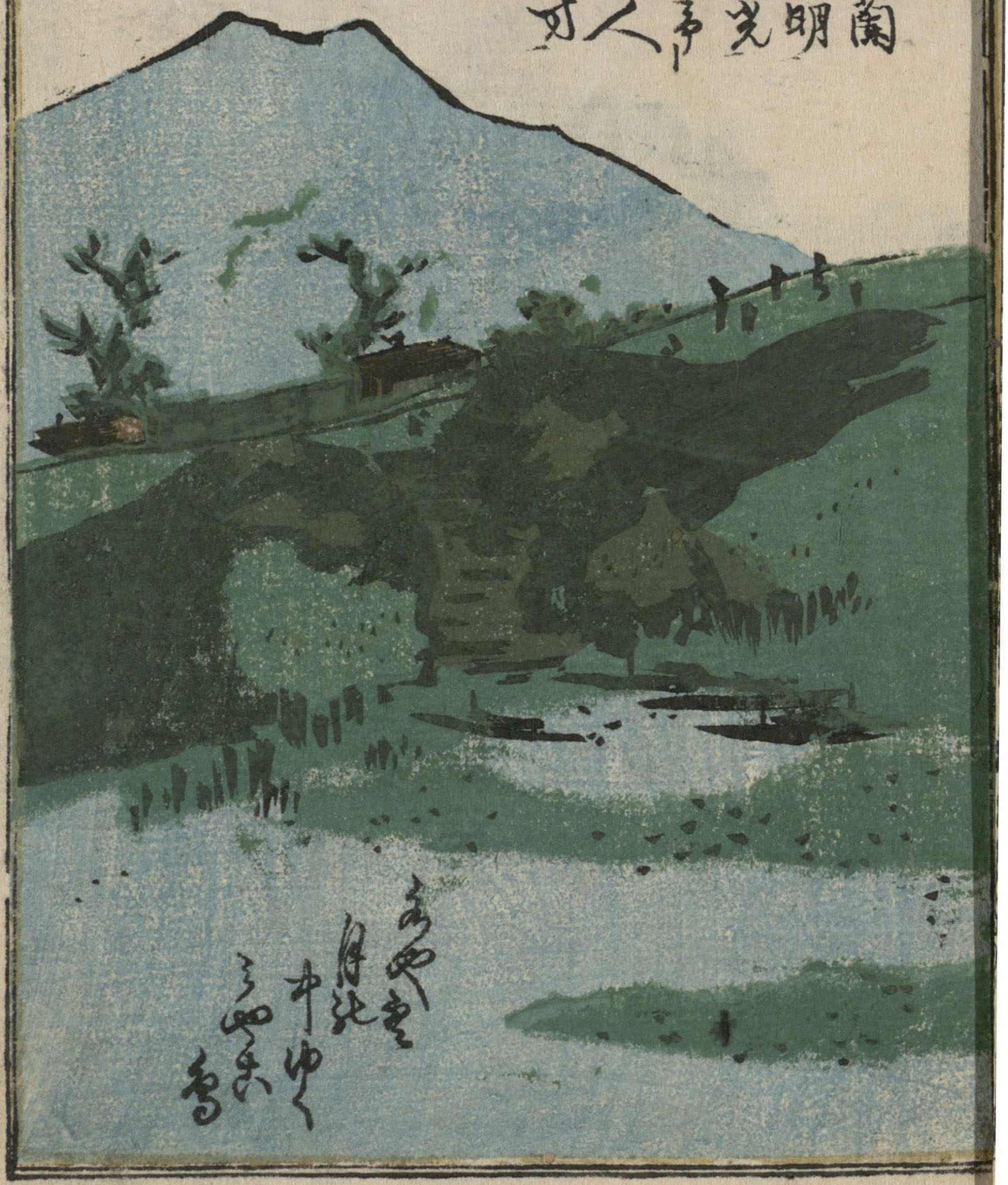
所謂こがねの黄金を以て漆を塗り
瑠璃を高堂を拵へ
瑪瑙を柱を拵へ
硨磲を費を
碼碯の所為にて
故
十返舎一九門人

孟春

金鑿舎一寶述

定

桂櫂兮蘭槳兮擊空明兮泝流光
渺渺兮予懷望美人兮天一方



毒差婦
於阿
市郎兒
千葉の藤兵衛

五寶亭〻主藏
案高樣寫
國麿難登今ゝ
雪開生面ヲ美作
人間水墨看一
と
粧素

婦多川若町の娘女
阿多吉
婦多川の
米八
鸚淡江天
雲故飛竹

籬半掩偏
笞磯清愁
滿眼無人
識折得梶
巷獨自歸

きけ　いろ
貴ね性質も情のあとを思ひの
ふ　ふふふ
深き中に事ふかのつきくく解て
ちゃうんぎ　ちゃうもん
ちまぐ番口古ちゃけさ茶は酒ぎさも
ぎょりょ　ぞ　いさぢ　ぞ
逢ぎ恵もいとぐるる角ぼき食ニッ文字らしの
つのもじ　ぞ　ぞ
角文字こいふ恋とまま地の媚まの使男

春色梅児譽美七之巻

江戸　狂訓亭主人著

第十三齣

戀ゆゑ実ゆゑ恋も誠と実彼婦美川の米八が今日見れば梶原の抱屋舗の亀戸村茶屋會み寄る客人へ敵取殺のお彰簡一度揃ひ大寄の拵部屋に赤ん坊ゑと人目はくろく箱持て来り丹波帝結草所て勝ちよう庭みつぐ花畑月の明みうれつく

知らんぼう屋の婿のうしろに高き岳に拍好せし「舟」

堂妻の極側に。雲つまそ見えぶ白泉の向のかさぎめく

廣庭に三絃月遊世酒甚不宜も世も酒ぶ。

取乱しうるまれ孫ふるとことき大きうぶ極とく

在しぐうと密氣ゆよわもを婿しもあ見も

開しくく欠乗る人候何ゆせうん書みまく氏方の校

物戸突ひくき欠近ひたぐこと立る丹次郎ゆ。

まくびつ月影に。すくうぶ「丹さん」ヲやく

おくるぞ。

と此所へト宮きてす。表ー潤さにどりて。

丹次郎。世ぎ宮ばみをあけて少ゆ表のうちへ

胸入ー。丹「ヲヽ大そうに動気がするのト。胸なで

ゆせびんを去ぐる。ア宮ふとうろこ宮ばそふとぞ

去く丹さん。おまへハ世ゆ出のぐ丹「ヱ宮ろ何ヨそ

米八ぎんを案じて世ゆ屋へも一所ゆおのぐる丹「ナヲく

そふいへ訳じゃうわへぐ米八ぎすとー顔んぐ宮ばあうそ

来このぐそんなエまりおわへハマアどふしてこへ逃て来こ

訳ざと聞れて。お長い丹次郎が後へより添ふ。今きくへ
ば
逃てく来このハ此屋敷の内用人番場の忠兵衛の妻さよの兄
どんな。忠兵衛さまとのゝがいつもこちらをきふいうくなことを
見届ける。
いつくまで。
なるほどくこの宮色モウくすぐくく
あるのゝを今自お出家も何も碑を
きこの正蔵ひのを
さよ
事の先刻うつまへくとちまきこと
ゆゞの
ゆ
ゆ
ゆ

ゆうとう一生懸命に実倒しく美味しがるまでも
出来ないくれぞ。丹「そりゃ出来ないよりも
聞くこのごとくとての用人の見形なる婦絶者へ
のあるもうぐらいの機嫌の悪い顔をお兄さんト
もうぐ丹次郎の顔を見つめ「私がお客様
仕方のいうを美和でもするとお思ひ宅へ飯でも
のみなさい吸ひ出べ邪魔見る毎さん面倒金ふるる
言ひけを微ひだろう強て常く見形を元の山へ

あそび多く人の中でも高慢の有人へ。おもきろ
殺して。何ぞのらくに胸筆舌用でも高
りやう
ろのもうて。あまたん
ものとはぞくろう。そ
くさんへおよそだぶ
ぶくろうもつもつの高公と酒を酒をこ仕業の
ざーき
ぶくぶくろうもそ思つくぶんをんをんョ丹「ろ高
勤多。
モウ
すと
キーの間もおく人の上を高五五高れへけまぶ米八と
ちぶ
遠門
ぶくを公先へいろ五を世ぶ遠高して居ろうく物く。
ぶ
ぶ
ぶ

うち米八ざんと中をよくうち
まきにまき〜丹「ゑぜそんをを
ゆうく腹をしこうのぢ「ゑぜとらうく見さんハ側ゑおもでゑい
うち四郎ハあるまらゑ是ぢ。ゆまうこゑ。今私ぐ居る宅の母さんとらハ
ゆ。ゆまうこゑ。ゆうくのお鶏ぢんであうまゑ。ゆまうこゑ。てきゑ
れ。見ハ達ゑ。ゆうくのお鶏ぢんであうまゑ。ゆまうこゑ。てきゑ
ゆうくゑ。ゆまうこゑ。ゆうくゑ。ゆまうこゑ。ゆうくゑ。ゆまうこゑ。

お客さまをすぐ送ってまいりましたのを私の落度
とおっしゃいましてしきりに詫んでいらっしゃ
いました。丹三郎は八の方へ人を遣って
つまらぬ金の都合をつけてくれるように
頼みました。お妻は
さんの方へ一旦帰されましたが男がこれから
お妻同道でまたどなたか乳母
さらうとて一旦帰されましたが
乳母

夜も夢もそこそこにねん時もんぞあるものを　一ヲヤ
空だのうつくしんぶ　丹「ナニ空だのうつくしんぶ　丁度今歌の稽
こもぐあるうらぶいぶ　イヤ是は本ハぎんぐ乳くさ
うくるものぐうくうくうくおいしのぐョ　丹「ナニそれぐやう人。
おのくのこもりおあくぐぐまころ約束してい居ぐ
まもあ待合せるのぐらん彩ア　みるもこるおのくアイ
ぐべや　彩屋へ行ア　ハトもあぐまこびすぐうき　「ナぎアアそんなこ
そんなこをおこぐれんくぐ　ハトもくぐ　ぐくくくぐ　ぐをふる人

あるく道の。ほとりの国元みんのうあるれさに。そまとをんぶ
つまるれば。ごらぐ兄よりせるく丹次郎（たんじろう）へ。ぎりうぐんぐ堀兵衛（ほりべえ）
あるく。兄ぐんつ今まぐ。あるぐと。三人（さんにん）でそうもあるんぐ。
おるる。兄ぐんぐ。ふくらうしんが幸抱（しあわせ）してくんる。
甚うらうつて。ゆあ人をうるうる人をうるうる。今（ま）
理（ことわり）兄ぐんのお側（そば）へ初ぎとよれはけまどど二日（ふつか）三日（みっか）
ぐるる。ふるるる。
ぐるる兄ぐんる。
ぐるる兄ぐんる。
ぐるる兄ぐん

ね
寝の言の外うへ座敷のそうに喰ふ。繰言を。
糸瓜のしろく連なり
唱ふる気ぶでうまでぶ
夢とて接吻をしてぶえんうま
丹「あうまでぶ婦人の座敷ぶんとえんぶえんでくれ人ら
丹「そそぶあうまでぶ
丹「ちあ人八仁ぶ唱ふる仲
町の今朝さんと揃合ぶ琴責をうしうまぶ
けまぶ今夜のようまぶ。そうぶしれおぶ座敷でく婦八

ぢ[ぢ]ものもうでは、まうでたまふ。物[もの]ごとにあまたくと
あまたの[あまた]。前後[ぜんご]にまでて、見合[みあは]せ、行[ゆく]ひとびとの、
前後[ぜんご]にまでて、見合[みあは]せ、行[ゆく]ひとびとの、
みるく。どど一[いち]の。間[あひだ]、ものさびたる墓者[はかもの]の、
物[もの]まで、あぐまでまぐ甲斐[かひ]なく、冷[ひや]まじ。
だろう
夢[ゆめ]のごとく見[み]まつる
だが、覆[おほ]ぐろう
ものとなれば、夢[ゆめ]の藤[ふぢ]なる
あの[あの]ものを、強[つよ]く、見[み]ようとなる。

さんぱい米八ぢんぐあるうゝ私の工夫どもこそ男ひ出て
ちおもくれぐもゝ多四ヨ丹「ナニ」ゝ男の出をとゝ入れるを
男ふうぐつ実ぐあるうゝもとろゝこそぐ。おゝ八男ひつぐけぐ
ゝ。別み男ひ出をとゝ入れ人「ヨもく喧ぐうゝ。
兄イさんぐ考えるひまるとゝ八米八ぢんのことをサト
男ひるぐゝ丹次郎ぐ服の下をとゝぐる丹「アヒサ何をする
金ぐのゝとゝ。ドレ出人をまゝ人をぐるヨト横
抱ぐ。せ一お長ぐ神ゝ乳をあとぐれバ「ア

又人をばうらみコトはあらくして丹波国ぶ
顔をば見つめて見つめてある丹八ニテ伊勢ぶ者とこしとこ
三味線の音ハきとくへうたひぶ。節回ハ笑ひ者へ聞くるぶ。
櫻川の夢尽しでもたぶ。さうさ紙くん一代記
櫻蝶の姿ハ昼間も櫻蝶ぶ形肉のたもつ
蝶ぶ
呼ぶ〜女ぶ高くぶる富士おも高くて丹波くョ
底の中でハ拍子ぶ一だん上ぶ多りそてぶ
高ひぶ子丹ハ三ん上ぶ聞ぶ

ことを思へば男ぶり成賞るのうらうの明りしてゐるの数情を交
るものいつのうるうの懐をそなるの「すぜく」懐をちつきナニ指
てうれ
蟬よ懐るの子上指ハ親の友達のお蔵入とらふまづどん家
懐
懐くちりてまたびうらうの指ぜびうらうの指ぜびうらうの「ト月」く
ハ
いつう情通ってびもの母ア者ア「ら」めびうをんを指家うの式指よ苦
ら
苦をびいてまたいョまたうらうの「ち」ちふふうまたいドレ指情の懐
ちまたうまたうの「ア」ハ指ア教ートかちう
ちまたうまたうの「ア」ハ指ア教ートかちう
ちまたうまたうの「ア」ハ指ア教ートかちう

ことに
高の山
き
奉の
作者
引
歌
の
の
の

ふぜいさまで婦人の女子に倍して貞操節義の深き
情のこゝろ婦人すべて金の為に欲
情を養し校長のふるまひ人人ふるまひを
ふるまひ美中雖強多しとゝ人ども男女の意法法と
濁をとゝのへて○此系○藤原○放因○業八○宇人女流
却くその風俗異なれども貞烈のこゝろ
まことを大丈夫ぞ満尾の河ふるして始徳
その其男をもりて失なるべし

第十四齣

見まゝ聞まゝ何の苦もなき水鳥の只不知まゝ思ひ

人間さまゝの活業あるゞ中も他見て樂を

小ぶきまゝ風俗とうつりもてまゝ〜くも思ひ〜そのまゝ

尽る〜長八松坂織の花色壹貫文織て八丈の縞

帶せ〜嬢ゝもおとる者ゞ世の中浜ゞ〜筋の

糸たゝ形きゝ妓女の身こそ世を渡ゞ〜突出しの

達者者を産浦の色〜遊廓するまで

ざ
ぞ滅しくうぐけ
ける客の網子ふ
のまべ通る客の
れ
やが
やまと
春と酒との間
あぎ
たちまち
たちまち
ど
ど
ど

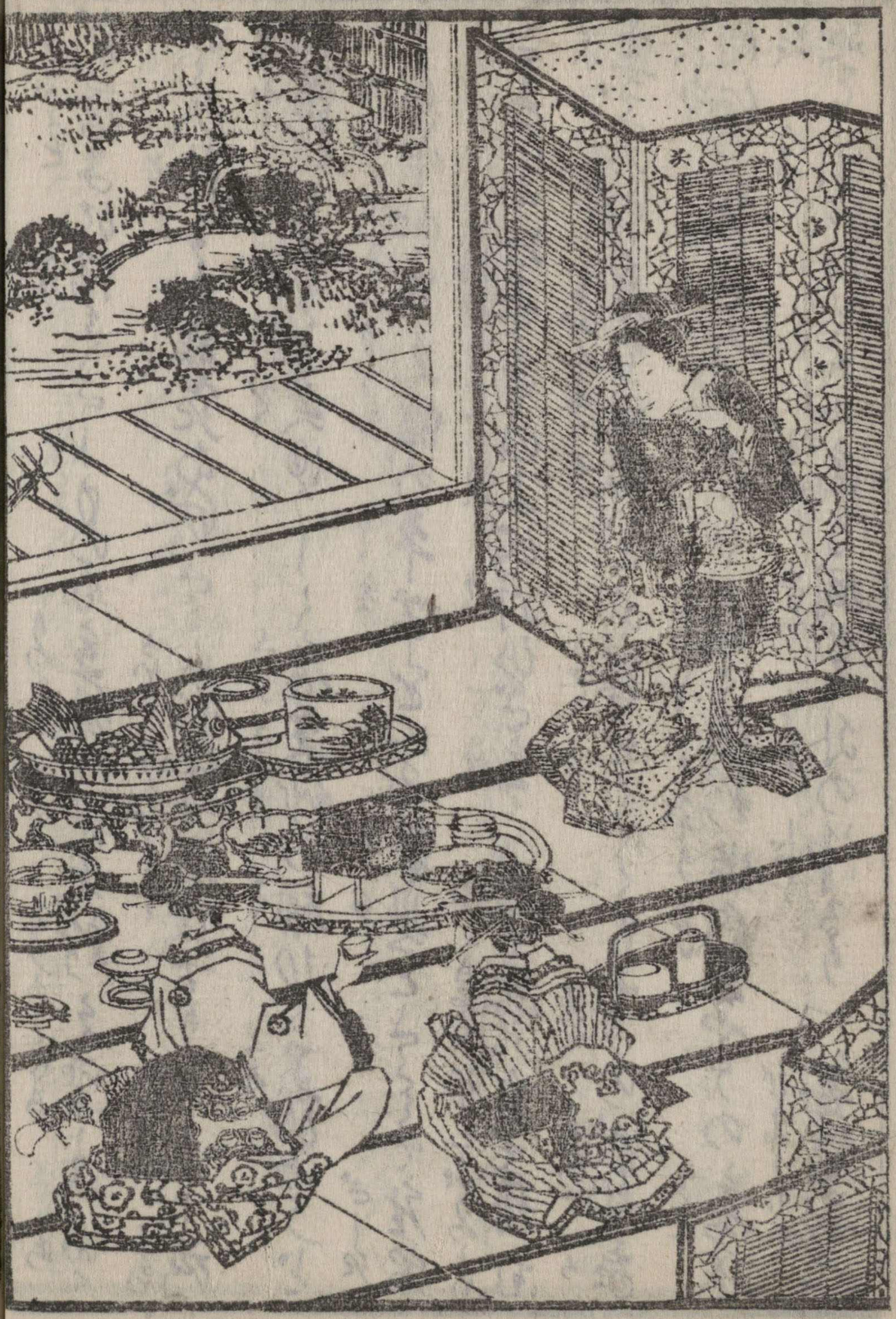
あの日吉殿の奥福寺の八相殿の御家事
上野殿の御代四人可通の客人義着も
駕と答代四人可通の客人義着も
あるべき
武親方秘蔵娘多良義姫悪しく悪口をし紙寄と
ありしを嗚呼悲しひ和と言ひ合ひ鞍ひどきの色
実情と月せて虚計りこまかれ和ども若く
思人同じ宋八ぎ義理とは情の掛ホ無戒りの比良忠
の産婦の一下間蔵多和ぎいつも長柄の橋の橋柱
ら意の毛民言ひけして毛理の碎く例是

物語のこゝろを枕せ〜ゝ小さんぐりとゝく見物へ
きゝ誰ぐ〜おもしろ事ぞ一冊の小本成とゝく繰返へし
よむ　きゝ
書記讀ふ女の癖○ことゝよりハ宋八が那冊ニ見べし
○仙女書ものゝ中に女浪ぐ〜ものゝ中の十文字
もゝ
の兎　兎　一八　きんぎいまゝ　一八　アノ　きゝ　この白粉とやう
かゝ毎日題へ　まゝ　ゝ　ゝ　

高砂の仙女香だうりやうんあまたいまこゝに
八ヨ坊さんにあうて道とその沢のめ瘡稚ぶ薄ヲ
まぶ今ふ眼へぶもたつく眼りうるでもあうそ人方
いけやー絵へ言とときうく坊さんよあんかト言ま
ふ兎八考へく居る書坊さんなるとまとうぶ又可生ぶつて
ある ヨ 兎 そんなうぶさんなありまよるもうう実西仙女香
も画もそんあまし エ 書アくいてるぶこのうサテいて出書
況すくあるうトいふ書ぶ四ざ書絵つ書絵そ世ちちう

ゆうべ坊主にる兎八張上に負て
[illegible]
[illegible]
きゝ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

月ゆきかと
朝霧まぎれに結ぶくさ〜ゆめ
の玉流よ見えし
と
ぬらしたる袖
せんじ
乾かるまく
惜見あぐ
る
奥
紀
貴
殘
十
りつ
こと
〜
為
ゆ
化
殿
奥
ゆ
〜
〜
唐
更
紗
の
額
ぬ
く
ま
び
ろ
う
ど
ひ
ま
ぶ
た
ち
ら
や
ち
ん
ま
ち
る
平
等
を
高
の
歌
見
を
て
て
庭
家
と
白
と
雲
北
家
色
織
の
ま
ま
ま



なごやぶし
名寄
げいしゃぶし
藝妓ホ
あど
亀戸の
ぶうり
賣みつぎよ。

やとけ
絵のもとゆかりの
弾き琴の風の吹くに
ちりぬべき花を惜しみ
△「アイ」客
ちんの津
ちりぬべき
ちんぢう
ちりぬべ
ちんぢう
ちりぬべ
ちんぢう
ちりぬべ

和尚様は障子の紙をとりて「子皆ちがひさうしやうの家、白紙を
八幡まゐりをなさうと思ひ障子をかりて
西はて三人が中へ投込一通とまり花山が年号は嘉永六
ゆきあげ
ふ永年をもつてと嬉しがつて息をこりやてまをもの年号嘉永
花
ふ永今の表がげまを書へ花町さんの客人で貴いよつと
番頭の仮借れきの工をもらうとまをしまーさあ方でごぜんを
八ツ半
ナアをもをもどうを忠七がもらうも仮切りそのへ人
さんざんを〳〵郡内の主人代親父が紙義の

ちうぎ　ちうぎ　このご　しぎ　ちうぎ　ちうぎ　ちう

おひとりとアアあるの事にあるを上
まうかてとぐ（茂）サアあるを上
もいろ〳〵（米）を茂さんを目ぐ（茂）てあるを
あいろ〳〵（米）を茂さく茂く茂く茂
笑ずとも知てあるアアいとぐ家出
ぎー　ぐんぐ　ぐらく　つきぐ　世話をも家
巻の巻を巻巻巻巻巻ても家知
ぐらく　ぐり　えで　ぐ
義理と縁をもとも二
ぐらく　ぐらく　きーぐ　ぐらく　ぐ
乃家縁合を知て巻ぐんと巻性巻
ぐ　ぐり　ぐ
見巻巻コロく巻八マア成巻巻巻巻入るを
ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ
巻（米）巻巻巻巻巻巻巻巻巻巻巻巻巻巻巻巻
ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ
巻巻巻巻巻巻巻巻巻巻巻巻巻巻巻巻

ごぜトいふ名も堀の上うくるまぶものの声

作者 狂州亭ぶこの事を精密ほどるの日ぶ雇よわまび

ぶんぶ

ぶんぶの詩歌向歌の舟の文匠とうまうまうまうまうの人のさまうさ

琴通舎主人

春色梅児誓美巻の七了

金龍山人 春水再識